

脳疾患と可視総合光線療法

財団法人光線研究所 所長
医学博士 黒田一明

脳の主な疾患には硬膜下血腫などの外傷、神経膠腫などの腫瘍、脳出血などの脳血管異常、パーキンソン病などの脳神経異常などがありますが、光線療法はこれら脳の疾患にも数多く使われています。

可視総合光線療法は光、熱エネルギーによる血行改善、ビタミンD産生という大きな作用を介し、さらに免疫細胞、メラトニンなどの内分泌、自律神経系などの各生理機能の調節作用も加わり、脳神経系異常に基づく各症状を改善、一部では治癒させることができます。

今回は、脳疾患の中で脳卒中（脳梗塞症）、脳腫瘍（聴神経腫瘍）、てんかん（小児てんかん）の3例について解説します。

■ 可視総合光線療法

- ◆ **脳梗塞症**に対して、光線療法は手足の麻痺や言語障害などの各症状を改善し、日常生活の質の向上に寄与します。本症では血液が固まりやすく（凝固能の亢進）、血栓ができやすい傾向がありますが、光線療法は冷えの改善やビタミンD産生によって血液をさらさらにする優れた作用があり、梗塞の治療や再発の予防になります。この作用は狭心症、心筋梗塞症など血栓が関与する疾患にも利用できます。
- ◆ **脳腫瘍**に対しては、既報のように光線療法（紫外線）によるビタミンD産生増加と腫瘍、ガン発生との逆相関が見られます。即ちビタミンD摂取量が多い、血中ビタミンD濃度が高いと腫瘍、ガンの発生が低いと言われています。これはビタミンDがガン細胞に直接作用するとともに、ビタミンDが免疫細胞を介し間接的に腫瘍細胞の増殖を抑制することを示しています。
- ◆ **てんかん**に対して、てんかん患者は日常生活が不規則になりやすく、身体が冷える傾向があります。光線療法は冷えた身体を温め、食欲、睡眠、便通など生活状況を改善します。一方、不規則な生活に伴って日に当たる時間が減りビタミンD不足に陥りがちになるとともに抗てんかん薬の副作用でビタミンD値が低下することもあります。この低値は発作を起こしやすくなるので、光線療法のビタミンD産生作用によるビタミンD値の是正は大変有用となります。さらに、うつ病に利用される光線療法（可視光線）の眼への照射は、てんかん患者でも乱れたメラトニン分泌を改善して発作の閾値を上げて発作を減らす作用も指摘されています。
熱性けいれんは、てんかんではありませんが、光線療法は風邪の場合と同様に温熱効果、抗炎症作用、解熱作用などが速やかな解熱につながり、けいれんの出現を抑えます。
- ◆ **治療用カーボン：**
脳卒中は3002-5000番、1000-3002番、4002-5000番。
脳腫瘍は1000-5000番、1000-4008番。てんかんは3002-5000番、1000-3002番を使います。

- ◆ **照射部位**：間接照射として⑦10～20分間、①②⑤⑥③④各5分間、症状に合わせてこれらの部位を組み合わせる。直接照射として脳梗塞では手足の麻痺があれば麻痺側の肩、肘、手などの各関節を集光器を使用して追加する（1号または2号集光器各5～10分間）。脳腫瘍・てんかんでは前頭部、側頭部、頭頂部のように腫瘍の部位、てんかんの異常部位に合わせて照射を追加する（2号集光器5～10分間）。ただし、頭部への照射は不快感が出ることがあるのでその時は頭部への照射は中止する。てんかんの場合は眼部への照射で発作の一時的な増加がみられることもあるので、治療初期は眼部への照射は控え、経過をみながら追加するとよいが、無理に眼を照射しなくても全身的な照射で十分に対応できる。

■ 脳 卒 中

脳卒中とビタミンD（米国の研究2012年）

ビタミンD摂取量と脳卒中発症数の関連を、45～65歳のハワイ在住日系米国人男性8006例を対象に34年に渡り調査した。その結果、ビタミンD摂取量が少ないと脳梗塞、脳血栓の発症リスクが高いことが判明した。

一方、女性についても同様の結果が報告されている（**米国の研究2012年**）。米国の看護師健康調査の参加女性を対象に、血中ビタミンD濃度と脳卒中の関連を検討した研究で、血中ビタミンD濃度が低いと脳卒中リスクが50%高くなることが明らかになった。また、脳卒中になった患者では高血圧、糖尿病、アスピリン服用の人が多いことが多かった。

■ 治療例 脳梗塞症・左膝痛・前立腺肥大症

83歳 男性 無職

- ◆ **症状の経過**：50歳頃から左膝痛があり、整形外科、整体、鍼灸などの治療を受けたが改善がなかった。52歳時、知人の紹介で当附属診療所を受診し自宅で治療を始めた。63歳時、右手のしびれがあり整形外科で頸椎症と診断され牽引を受けた。当所を受診し、1000ー3002番で治療し半年でしびれは完治した。74歳時、左半身のしびれが出現しCT検査で軽い脳梗塞症と診断され投薬を受けた。治療法確認のため当所を受診した。
- ◆ **光線治療**：脳梗塞は治療用カーボン3002ー5000番を使用し、⑦10～20分間、①②⑤⑥各5分間、③5分間と④各5分間の交互照射。膝痛は3001ー4008番を使用し、左膝部（1号集光器使用）10～20分間照射。
- ◆ **治療の経過**：自宅で毎日光線治療を行った。治療2年後、左半身のしびれは軽減し、左足の甲のみしびれのみが残った。以前から光線治療を行っていたので脳梗塞の症状は軽く助かった。83歳の現在、前立腺肥大症、左膝痛があり、光線治療はほぼ毎日継続している。

■ 脳腫瘍

紫外線量（血中ビタミンD濃度）と脳腫瘍発生率（米国の研究2010年）

この研究は、脳腫瘍発生率と日照量、血中ビタミンD濃度との関連を175カ国のデータを使って検討したものである。紫外線量は緯度によって異なり、紫外線量が多い赤道近辺から緯度が高くなれるにつれて紫外線量は少なくなる。各国の脳腫瘍発生率と緯度の相関をみると、赤道から離れるほど脳腫瘍発生率は増加し、男女とも同様の結果であった。紫外線量が多いことはビタミンD濃度が高いことを反映していると考えられることから、実際に血中ビタミンD濃度と脳腫瘍発生率を検討すると血中ビタミンD濃度が低いと脳腫瘍発生率が高いことが示された。

■治療例 聴神経腫瘍術後・術後の顔面神経麻痺

85歳 女性 主婦

- ◆**症状の経過**：54歳頃から左耳の聴力低下、耳の閉塞感、耳鳴りがあった。56歳時、脳外科の検査で聴神経腫瘍と診断され手術を受けた。術後は合併症で左顔面神経麻痺が出た。63歳時、前回手術した部位に水が溜まり、腫瘍再発もあり再手術を受けた。再手術から7カ月後、知人の紹介で再発予防、顔面神経麻痺の治療で当附属診療所を受診した。
- ◆**光線治療**：脳腫瘍は治療用カーボン1000-4008番を使用し、⑦②⑥各10分間、⑤⑥③各5分間、顔面神経麻痺は3002-5000番を使用し左眼部、左頬部（以上2号集光器使用）各5～10分間照射。
- ◆**治療の経過**：自宅で毎日光線治療を行った。治療2年後、顔面神経麻痺の症状は少しずつ改善がみられたが、脳腫瘍は再手術前と同じくらい大きくなった（3cm）。腫瘍がさらに大きくなれば手術が必要と言われていたが治療4年後の検査では2cmに縮小した。手術は不要となり経過観察となった。光線治療10年後、腫瘍は1.4～1.5cmとさらに縮小。治療15年後、腫瘍は1cm弱と小さく担当医から心配なしと言われた。この頃椅子から落ちて左上腕骨を骨折し手術を受けた。骨折部を3001-4008番で治療した。治療22年後の現在（85歳）、顔面神経麻痺の症状は多少残っているが、光線治療は週に3～4日行い脳腫瘍の再発はなく、元気に生活している。

■てんかん

ビタミンDとてんかん（ハンガリーの研究2012年）

てんかん患者はビタミンD欠乏症の人が多くと言われている。この研究は、てんかん患者の発作のコントロールに及ぼすビタミンDの影響をみるため、13人の薬剤抵抗性のてんかん患者（29～60歳、てんかん歴10～40年）にビタミンD3を90日間投与して検討された。ビタミンD投与により全員の血中ビタミンD濃度は正常になり、10人でてんかん発作は減少、2人で増加、1人は不変、発作の平均減少率は40%であった。以上から、治療抵抗性てんかん患者にビタミンD3の投与はてんかん発作を減少させることが示唆された。

デンマークの研究（1974年）でも抗けいれん薬服用中のてんかん患者にビタミンDを投与すると約30%発作が減少することが報告され同様の結果であった。

■治療例 てんかん・慢性扁桃炎

23歳 女性 会社員

- ◆**症状の経過**：1歳4カ月時、扁桃炎の高熱で熱性けいれんがあった。その後も発熱の都度熱性けいれんがあり、12歳時てんかんと診断された。中学校に入学してから高熱が頻回にありその都度けいれんを起こしたので14歳から抗けいれん薬を服用した。その頃知人から光線治療を勧められ、早速治療器を用意し当所と相談しながら自宅治療を開始した。
 - ◆**光線治療**：治療用カーボン3002-5000番、1000-3002番を使用し、⑦②各10分間、⑤⑥③④各5分間照射。
 - ◆**治療の経過**：自宅で毎日治療を行った。激しい高熱時は足裏を一晩中照射し、熱の上下はあったがけいれんは出なくなった。中学時代の1～2年は発熱、けいれんが多く体力がなく視力も0.1まで低下、光線治療で体力が付き視力は0.8まで回復した。また、てんかん性頭痛のため起き上がれず学校は1/3程度しか登校できなかった。骨の成長も悪く、骨折の治癒に普通の3倍時間がかかった。脳波検査で右脳に異常があったが、薬剤と光線治療で1年後には脳波の異常はなく、治療2年後の脳波も異常なく薬剤を中止した。しかし、7カ月後、左脳に脳波の異常がみられ薬と光線治療を続けた。高校生の頃は扁桃炎、発熱、けいれんはみられず、17歳時の脳波検査は異常がなく薬は中止となり、光線治療で体力が付き元気になった。大学生となった20歳時の脳波も異常がなかった。23歳の現在、会社員として元気に働いている。
- 【お願い】** 脳の疾患について光線治療の方法が分からない場合は、本人か家族などの代理人の当所受診をお勧めします。なお、脳の疾患はどれも自己判断は避けて病院治療を必ず受けてください。